

企業リスクインフォ <2013 年度第 6 号>

大学での防災・減災活動 (関西大学での取組みをふまえて)

1. 震災時に大学に求められること

大学における防災・減災活動は、①大学本来の事業の回復作業と②大学が果たすべき役割の遂行の2つが基本となる。前者のポイントとしては、「学生の安全を確保すること（後述2（1））」と「大学施設自体の安全を確保すること（後述2（2））」であり、後者においては、「大学が地域の防災拠点となっていること（後述3）」が挙げられる。上記の活動の基本について、講じられた対策を周知徹底するための有効な手段のひとつが、「訓練」である。そして、教職員だけではなく、学生も巻き込んで訓練することで、被災時にどのようなことをすべきか等を教職員と学生で共有することが可能となる。

本稿では、先進的な取組みを行う関西大学のコンテンツ（実施内容）を紹介しつつ、それぞれのコンテンツについて解説していきたい。

関西大学では、2007 年以降毎年、学生・教職員が一体となって防災活動を行っている。同大学の行う訓練を中心として防災啓発活動は先進的な取り組みとして認識されており、他大学の関係者も多く視察に訪れている。今年度は、「関大防災 Day～広がれ！みんなの安全・安心！～」として、近隣の連合自治会や行政、民間企業の協力を得て、2013 年 10 月 17 日に実施している。当訓練は全キャンパスで実施し、避難訓練や炊き出し訓練に加えて、消火器使用訓練・消火栓からの放水訓練や、自治体の防災啓発ブース、民間企業等の防災関連ブースなども企画された。

2. 大学本来の事業の回復

(1) 学生の安全確保

学生の安全確保としては、「円滑な避難の実施」と「安否確認」がポイントとなる。

①円滑な避難の実施

災害発生時の避難をスムーズに行うためには、日ごろからできるだけ多くの学生を巻き込んだ訓練を行うことで、学生の防災への理解度を深めていくことが必要となる。

関西大学では、講義時間中に訓練を行っている。学生は、校舎ごとに決められた避難場所に避難する。最寄りの避難場所が、建物の各フロアに設置された消火器の近くに明示されている（図1左、太枠部分）。

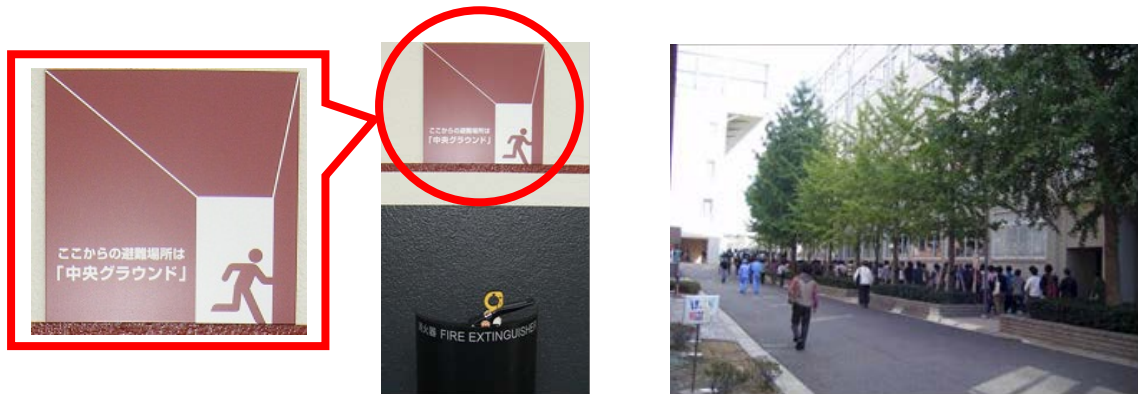
講義中に避難訓練を実施するために、関西大学は講義時間を早めに切り上げることで対応している。このため講義を受ける学生は、避難訓練に自然と参加することとなる。また訓練開始前には、訓練実施時間中の講義を担当した教員から、「地震発生時・避難時の注意点」に関する説明を学生に対して行うことによって、災害発生時に自身がどのような行動をとるべきなのか、についての教育も併せて行っている。

なお、建物自体に耐震性が確保されている場合には、屋外へ避難するよりも屋内に留まることが原則ではあるが、関西大学では、「〇〇学舎にいる場合は、●●グラウンドに移動する」として、「どこに避難すべきか」を、訓練を通して周知することを優先している。

②安否確認の実施

大学は、学生の安全を確保するとともに安否を把握することが求められる。安否確認の具体的な方法としては、システムを構築し携帯等から安否を登録する方法や、大学構内の避難場所で安否を確認する方法などがある。

関西大学の安否確認訓練では、大学側が誘導した避難場所で、学生に安否確認シートを渡し、学籍番号や今後の予定（直接帰宅する等）などの必要な情報を記入・提出させる。避難訓練では、学生個人の情報を集約することで、災害時の安否確認方法の有効性の検証も行っている。なお、安否確認シート等の配布・回収時には、学生の混乱を抑制するために、寒色系の旗を立てているところで安否確認シートを配布し、暖色系の旗を立てているところで安否確認シートを回収する、といった工夫を施している。



【図1】建物内における最寄り避難場所の掲示 [左] 落ち着いて避難する学生 [右]
(インターリスク総研撮影)

(2) 大学施設の安全確保

火災が発生した場合、大学施設の安全を確保するためには、消火器を使用したり、消火栓からの放水活動を行ったり、高層階から避難器具を使って地上に避難することが必要となる。

ケガなど事故が起きること等への懸念から、これらの訓練実施を避ける大学も多いが、火災が発生したときは、学生が避難や消火対応にあたることもあり得ることから、使用方法を予め知っておくことは極めて重要である。

関西大学では、これらの訓練に学生が参加するよう促しており、より多くの学生たちに体験させることで大学全体の防災力を引き上げている。

①避難器具を使用した訓練

避難器具を使用した避難方法としては、垂直降下式や斜降式などがある。垂直降下式の避難器具はらせん状の通路を垂直に降下するものであり、斜降式の避難器具は避難口から地上の避難場所へおおむね45度の傾斜をもたせて降下するものである。特に斜降式避難器具は垂直降下式の避難器具に比べると速度が出やすい。

関西大学では前述2種類の避難器具をつかった避難体験を行っており、体験者は降下する際に自分自身で調節することが必要であることを、体感することができる。

②消火器を使用することや消火栓から放水活動を行う訓練

実際に消火器を使用することは少ない。したがって、「炎に向かってではなく、燃えているものに消火器を向けること」や「退路を確保すること」といった、正しい消火器の使用方法を知らない人が多い。また訓練において、水消火器ではなく実際の消火器を使用すると、レバーを握る感触が全く異なる（消火器の場合、力を入れないとレバーを握りきれな

い) ことを知ることでもある。

消火栓からの放水活動も、消火器同様に使用経験がある人はほとんどいない。消火栓から放水活動を行うとき、火元に向かって放水する瞬間の水圧はとても勢いがあり、力を入れて構えないと水圧に負けそうになることは、体感しないと分からない。



【図2】消火器体験[左]と消火栓放水体験[右]（インターリスク総研撮影）

3. 大学が果たすべき役割の遂行

地域の防災拠点として機能していくためには、自主防災組織など地域との連携が不可欠である。スムーズな連携を実現するには、顔が見える関係を構築していくことが必要である。実際災害が発生した場合、電気や都市ガスなどのライフラインが寸断されることが想定される。この場合、地域住民が大学に避難してくる可能性がある。

関西大学では、炊き出しに関する作業工程等の検証を含め、キャンパスに隣接する4つの連合自治会の協力のもと、炊き出し訓練を実施している。ここで重要なのは、炊き出し訓練そのものが目的なのではなく、炊き出しの実施に至るプロセスと、訓練を通じて構築できる信頼関係であるということである。

一般的に、学生が近隣に迷惑をかけているケースもあり（大勢で騒いでしまう等）、地域との関係が良好であるとはいえない大学も多い。訓練実施のための継続的な話し合いによって信頼関係が構築され、良好な関係を築くことが可能となる。関西大学では、上記のような訓練を近隣地域と共に実施することで、さらに良好な関係を構築している。

4. おわりに

関西大学のような取組みを大学で実現するためには、理事会や教授会の理解を得ること、全教職員が対応方法を理解すること、学生の避難誘導計画を整備すること等、課題も多い。

関西大学においても、全ての訓練項目が当初から存在していたわけではない。自らが実現できることから繰り返し活動を行い徐々に積み重ねてきたものが、現在の関西大学の活動を支えている。

以上

（文責：コンサルティング第一部 ERM グループ 主任コンサルタント 依田 麻衣子）

<参考文献>

- 1) 『大震災後に考えるリスク管理とディスクロージャー』(2013) 震災とディスクロージャーを考える会
- 2) 『「東日本大震災の被害を踏まえた学校施設の整備について」の取りまとめについて』文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/017/toushin/1308045.htm
(最終アクセス日: 2014 年 1 月 30 日)

株式会社インターリスク総研は、MS&AD インシュアランスグループに属する、リスクマネジメント専門のコンサルティング会社です。ERM のコンサルティングに関するお問い合わせ・お申込み等は、下記の弊社お問い合わせ先、または、お近くのあいおいニッセイ同和損保、三井住友海上の各社営業担当までお気軽にお寄せ下さい。

【お問い合わせ先】

株式会社インターリスク総研 コンサルティング第一部 ERMグループ

TEL : 03-5296-8914 URL : <http://www.irric.co.jp/>

<ISO31000準拠！ERM（全社的リスク管理）コンサルティング>

企業価値向上に資する全体最適の観点から、企業を取り巻く様々なリスクを全社的に管理するために、貴社の実状に即した効果的・効率的な体制づくりを支援します。既に体制構築されている場合の実効性を高めるための取組み推進や、各種個別課題解決のご支援も可能です。ERM コンサルティングは ISO31000 に準拠したメニューを活用・応用して実施します。

不許複製／Copyright 株式会社インターリスク総研 2013